プーチン重要論説集

ウラジーミル・プーチン 著
山形浩生 編訳

プーチン

思想・愛国・決断

プーチン自身が四半世紀にわたって
書き続けた20の論説を集成

解説
黒井文太郎
（軍事ジャーナリスト）

プーチン重要論説集

ウラジーミル・プーチン 著
山形浩生 編訳

星海社

272

SEIKAISHA SHINSHO

Путин своими словами: Избранные речи и интервью

Владимир Путин и др.

Под редакцией Хироо Ямагата

写真、原文は明記したものを除きすべて kremlin.ru と archive.premier.gov.ru より。

Kremlin.ru のものは CC BY 4.0 International.

archive.premier.gov.ru のものは CC BY 3.0 International.

翻訳は CC BY 4.0 International.

まえがき

編訳者の口上

この本は、ウラジーミル・プーチンの、１９９９年ロシア連邦大統領代行就任以来の重要な論説や演説を集めて翻訳したものだ。

実物を見てものを言う人を増やそう！

さて、この編訳者は別にロシアやウクライナや軍事や国際関係などの専門家というわけでは決してない。なんでこんな面倒なことをやっているのだろうか？　それは、専門家がやらないし、また何だかみんなが、あまりまともに元の発言を見てものを言っているとは思えず、不健全だと思うからだ。

２０２２年2月のウクライナ侵略以来、プーチンがなぜあんな暴挙に出たのか、という分析――および単なるゴシップや憶測――は山ほど登場している。そして当然ながらそれには、プーチンのこれまでの考えやその推移について、彼自身の行動や発言を通じて理解分析する

しかない。行動は、一応は各種報道などからわかる。そしてプーチンは、各種の行動についてそれなりに詳しい説明なり立場表明なりを行ってきた。それを見ることで、その背景についてある程度の示唆は得られる。その発言を盲信しろということではないけれど、少なくとも検討の出発点くらいにはなるはずだ。

だが、そうした論説や演説のまともな邦訳や報道にはほとんどお目にかかることがない。勝手な印象や言葉尻を捉えた議論ばかりが目につく。たとえば朝日新聞は、２０２２年3月17日に「プーチン氏『たまたま口に入ったハエのように、裏切り者吐き出せる』」という見出しで記事を出している。でもそれって、ただの例えでしょうに。実際の演説の全訳は本書に収録したが（「地方への社会経済支援をめぐる会議の開会の辞」）、もっとずっと重要な話が出てくる。ウクライナは核兵器を入手しようとしている、ウクライナで西側が生物兵器開発をしているといった妄言だ。そういうのを報道したほうがいいんじゃないだろうか。

他にもプーチンの重要な演説や論説はいろいろある。２００７年のミュンヘン安全保障会議での演説は、プーチンが西側との決別を公然と述べたものとして名高いが、まともな日本語の全訳はネットにはないし、普通の人が読めるような本にも入っていないようだ。

専門家がやらないなら、素人がやるまでだ。というわけで作ったのが本書だ。

もちろん、過去四半世紀近いプーチンの、ロシアの親玉としての経歴では、演説もインタビューも無数にある。だがプーチンのキャリアや、イメージを左右してきた重要な出来事があり、それに伴う各種の公式発言やインタビューがある。本書ではそうしたものを拾った。

これらを読むと、岡目八目ながら現在のウクライナ侵略に続くプーチンの考え方について、何かヒントや理解が得られるかもしれない。それは何か一貫性のある筋の通った考え方というより、「こんなふうにこじらせてきたのね」「こんなふうに歪曲しつつ屁理屈こねるのか」みたいな手口の理解、そして何よりも「なぜプーチンがウクライナを侵略しても大丈夫と思ったか」、という理解になるとは思う。が、それは読む人次第。それでも変な見方が混じったとしても、実物を見て物を言う人が増えるほうが、ぼくは圧倒的に良いと思っている。

プーチン治世略歴

プーチンの治世は２０００年元旦をもって始まった。エリツィンが、新世紀、新千年紀は自分のような古狸ではなく、新しい政治家の顔ぶれで、ロシア政治を刷新させたいと思って１９９９年大晦日に禅譲したからだ（新世紀や新千年紀の開始は、厳密には２００１年だというのは言うだけ野暮か）。

だがその後四半世紀の世界は波瀾万丈。プーチンの各種演説や論説は、そのときの時事的な出来事に即したものも多いが、すでに記憶があいまいなものも多いだろう。したがって、簡単にプーチンの経歴と彼にとっての各種重要事件をまとめておく。

あわせてもう一つ見ておきたいものがある。ロシアの経済状況だ。

プーチンはもちろん、強権的な独裁体制でロシアをまとめてきた。だがその一方で国民の支持はきわめて高い。彼の治世下で、ロシアはすさまじい経済発展を遂げているからだ。

１９９９年のプーチン大統領代行就任時点ではロシアは１人当たりＧＤＰが２０００ドルを割るという、発展途上国の下から数えたほうがはやい状態だった。だが10年しないうちにそれが１万２０００ドル。国内の格差はあるし、地方部は特にアレだし云々と言い出せばもちろんケチはいくらでもつけられる。が、所得倍増などというレベルではない。６倍、いやそれ以上だ。立派な中進国。しかもこれは平均だ。都市部の豊かな層は、ブランド品も買える、スタバでコーヒーも飲む、休みは外国旅行もできる。彼らは先進国の仲間入りをしたつもりでいるし、それは決して誇張ではない。

資源輸出で儲けただけだろ、というのはある程度はその通り。とはいえ、農業を始めそれ以外の産業もかなり頑張ってはいる。それに、エリツィン時代はそれすらできていない。プ

大統領第1期	1999	NATO コソボ空爆、旧東欧 NATO 加盟
	2000	プーチン、大統領代行／大統領就任
	2001	アメリカ 9.11 同時多発テロ、アフガン侵攻
	2002	ドゥブロフカ劇場占拠事件、アメリカ ABM 条約脱退
	2003	アメリカのイラク侵略、ジョージア・バラ革命
大統領第2期	2004	ベスラン小学校襲撃事件、ウクライナ・オレンジ革命、バルト諸国 NATO 加盟
	2005	
	2006	
	2007	世界金融危機
首　相　期	2008	北京オリンピック、ジョージア戦争、コソボ独立
	2009	
	2010	
	2011	アラブの春
大統領第3期	2012	西側によるリビア空爆
	2013	シリア毒ガス攻撃、スノーデン事件
	2014	ソチオリンピック、マイダン革命、クリミア侵略／併合、MH17 撃墜、ウ東部侵攻
	2015	ミンスクⅡ合意、ISIL 勢力拡大、欧州難民危機、ロシアのシリア ISIL 空爆
	2016	アメリカでトランプ大統領選出、Brexit 可決
	2017	
大統領第4期	2018	
	2019	
	2020	コロナ禍
	2021	アメリカのアフガン撤兵
	2022	ウクライナ侵略
	2023	

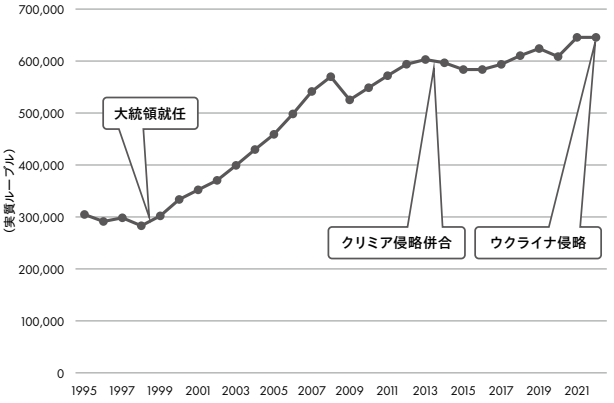
ーチンですべては一気に変わった。ロシア国民からすれば、プーチン様々だ。そしてもちろん、経済力は国力だし、プーチン自身の自負と誇りの源だ。２０１４年のクリミア侵略／併合の暴挙は、そうした国力に対する自負の反映でもある。

が、クリミア侵略／併合での制裁は大きかった。実質ベースで見ても２０１４年以後の経済成長はほとんど止まり、かつてのご威光は薄れている。クリミア併合は、ロシア国内では国威発揚でプーチン人気を大いに高めたが、その効果がどこまで続いたか？　２０２２年ウクライナ侵略は、その影響も考慮すべきかもしれない。

プーチンの変遷：本書のあらすじ

以上をふまえて、あとは実際に読んでいただければいいのだけれど、予告編もかねて、おおむねプーチン思想の変

ロシア１人当たりGDP推移



データ出所：世界銀行

遷を、編訳者なりにまとめておこう。実のところこれは、彼の公的な立場――大統領等の任期ごとにまとめられる。

大統領第1期（2000－2004年）：ロシア再興と内外のテロ対応を通じた西側協力期
大統領第2期（2004－2008年）：西側への失望と国力増大を背景とする傲慢期
首相期（2008－2012年）：ジョージア戦争に伴う西側無力の確信期、金融危機によるロシア経済失速と復活
大統領第3期（2012－2018年）：クリミア侵略と、紛争や難民の対西側武器化
大統領第4期（2018年－現在）：ウクライナ侵略への道

説明しておこう。

第1期、ボロボロの国を受けついだプーチンは、まずは国力増強を目指した。国を多少強権的にでもまとめ、経済を発展させねばならないし、そのためには西側の経済政治秩序への積極的な参加は不可欠だ。アメリカの9・11同時多発テロは、チェチェンやアフガンでの経験をもとに西側に恩を売り、ロシアの地位を高める絶好の機会に思えた。が、様々な分野で

ロシアの意向は無視され、プーチンは次第に失望感を高める。そして国内でも、チェチェン発のテロが次第に激しさを増す。

第2期になる頃には、チェチェンのテロ活動は、最悪のベスラン小学校占拠事件を生み出す。このあたりでプーチンは、国内、国外ともに方針を硬化させる。そして同時に、西側が悪意をもってロシアを潰そうとしている、イラク侵攻やミサイル条約廃止もすべて、アメリカがロシアを潰すためにやっていることで、チェチェンのテロすら西側の陰謀だという被害妄想の片鱗が見え隠れしてくる。経済絶好調で国力に自信を持った彼は、末期には西側への反旗を公言するようになる。

大統領は2期までという憲法規定のため、彼は２００８年にメドヴェージェフに大統領を禅譲し、自分は首相に退くが、ジョージアとウクライナでのいわゆるカラー革命でプーチンの危機感は高まる。一方でこのとき、ジョージア戦争でロシアが国境を越えた派兵をしても、西側の対応が腰砕けだったことで、おそらくプーチンは西側無力の印象を強めた。さらにＮＡＴＯが爆撃の末にコソボを独立させ、また国連安保理議決を歪曲してリビア空爆を強行したことで、自分が今後何をしても、公式には西側は自分たちを責められないのをプーチンは確信する。

大統領第３期、２０１４年ウクライナのマイダン革命に乗じた混乱をついて、プーチンはクリミアに兵を出したが、交戦は一切なく、単に住民安全確保のためと称し、しかもそれは現職ウクライナ大統領の要請だと主張、さらにその後住民投票の結果だと称してクリミアを併合。屁理屈ながら表向きの形式はそろえ、コソボを持ち出して併合への非難は打ち返すという、実に周到な建て付け。それに対して西側は予想通り何ら直接行動は起こさず、さらに各種制裁はかけたものの、シリアの毒ガス、ＩＳＩＬ対応や難民危機などで、ロシアは地域紛争や難民を武器化して西側を脅す手法を確立する。

そして……大統領第４期。しばらくコロナ禍もありあまり大きな動きがなかったが、２０２１年頃から急に軍事的な動きが見られ、そして２０２２年にはウクライナ侵略が始まった。が、これをめぐる各種の演説は、クリミア侵略の周到な建て付けや理屈の構築が一切見られず、そもそもこれがドンバス地方の虐殺なるものを防ぐための侵攻か、ＮＡＴＯ西側の攻撃（の可能性）への反撃なのかさえ明確にできない混乱ぶり。かつてのプーチンでは考えられなかったこの混乱をどう解釈すべきかは、まだわからない。

これが、プーチンの実際の発言から読み取れると山形が考える、彼の考え方の大枠だ。おおむね、２０００年代後半からすでに始まっていた西側への失望に、すべては（国内のテロ

まで！）ロシアをつぶす陰謀だ、という被害妄想が加わりはじめ、それが長い年月をかけて成長していった。そしていまや、ロシアにとって不利な動きはすべて、国内だろうと国外だろうと、西側の特にアメリカがロシアを潰すために仕掛けたものだという、被害妄想が完全にかたまってくる。

だが、少なくともクリミア侵略の頃までは、その妄想の表明の仕方はかなり巧妙かつ周到で、本当に彼がそんな妄想を持っているのか、それとも計算ずくの発言なのかはほとんど見分けがつかない。そもそもこうした被害者意識とそれを煽る陰謀論はロシア全体に蔓延しているものだ。プーチンは巧妙にそれを利用しつつも、変な陰謀論についての言及はうまくはぐらかしつつ、その背後の被害者意識は煽るという使い分けを明確に行ってきた。そして被害者意識をむき出しにして見せた後で「だがロシアは君たちのひどい手口にも動じない、国際法と秩序と国連決議に従って平和に貢献し続けるのだ！」と偉そうにふるまうための前振りに使うのが通例だ。だが、最近の演説などでは、そうした妄想がまったく整理されずに乱雑に投げ散らかされ、支離滅裂。周到な計算の結果ではあり得ず、彼が本当にそうした妄想に囚われている可能性が示唆されるのではないか。

が、みなさんがお読みになれば、またちがう印象を受けるかもしれない。それを是非とも

ご自身で確認してほしい。

なお、二つを除きいずれの文も、クレムリン等のウェブサイトに上がったもの（主に英語版）のプーチン発言を全訳している。おもしろいところだけを抜粋したい誘惑にかられたが、恣意的な歪曲と言われたくないし、どういう文脈で言っているのかも重要だ。

例外は、著作権上の扱いが明記されていない、就任直後の「新千年紀を迎えるロシア」と、まとまった談話ではないクリミア侵略併合直後のプーチン公開テレビＱ＆Ａの記録。前者は心残りだが、編訳者による要約、後者は注目すべき部分の抜粋とした。

また訳注は、事実関係として把握していないと理解しにくいものにとどめた。「お前がそれをどの口で言うか」といったツッコミを入れたい部分は山ほどあるが、その判断は読者のみなさんにお任せしよう。

目次

まえがき　編訳者の口上　3

第1章　第1期（2000－2004年）：ロシア再興とテロ対応を通じた協力模索の時代　19

新千年紀を迎えるロシア（1999年12月30日、要約）　24

9・11同時多発テロをめぐって：アメリカABC放送インタビュー（2001年11月7日）　33

モスクワ・ドゥブロフカ劇場占拠事件後の大統領TVメッセージ（2002年10月26日）　62

第2章 第2期（2004－2008年）：欧米への不信と決別の時代 65
ベスラン学校襲撃事件制圧後のＴＶ演説（２００４年９月４日） 76
ミュンヘン安全保障会議での演説と質疑応答（２００７年２月10日） 84
ミュンヘン演説などをめぐる記者会見（２００７年２月13日） 126
第3章 首相時代（2008－2012年）：実力行使の始まり 137
ヴァルダイクラブ会合：ジョージア戦争をめぐって（２００８年９月11日） 146
プーチン首相論説１「力をつけるロシア：迫る課題に立ち上がれ」（２０１２年１月16日） 162
プーチン首相論説２「ロシア：その民族問題」（２０１２年１月23日） 182
プーチン首相論説７「ロシアと変化する世界」（２０１２年２月27日） 204

第4章 第3期（2012－2018年）：クリミア侵略と欧米無力への確信 239
シリアという代替案（2013年9月12日） 250
マイダン革命とクリミア情勢：プーチン記者会見（2014年3月4日） 256
われ、クリミアを併合せり：大統領演説（2014年3月18日） 296
「ウラジーミル・プーチン直通電話」抜粋：
クリミア計画、緑の男、スノーデン（2014年4月17日） 321
国際連合第70次総会演説：ISIL、難民、経済協力（2015年9月28日） 334
第5章 第4期（2018年－）：ウクライナ侵略への道 349
ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について（2021年7月12日） 363
ロシア連邦大統領演説：ウクライナ侵略前夜（2022年2月21日） 396
ウクライナ侵略の辞：大統領演説（2022年2月24日） 431

地方への社会経済支援をめぐる会議の開会の辞（2022年3月16日） 448
予備役動員します：大統領演説（2022年9月21日） 472

まとめ　プーチン思想の推移 482

あとがき 508

解説対談　専門家に聞くプーチンの言葉と思想　黒井文太郎×山形浩生 513

出　典 538

第1章

第1期（2000－2004年）：ロシア再興とテロ対応を通じた協力模索の時代

2000-2004

１９９９年の年の瀬に、ロシア大統領ボリス・エリツィンは、時の首相ウラジーミル・プーチンを大統領代行に指名した。

プーチンは首相でもあり、エリツィン政権の中でそれなりの地位は占めていたし、実務面ではかなり優秀ではあった。その一方で、特に有力な派閥に属しているわけでもなく、クレムリンの権力争いの中では外様ではあった。が、それがよかったのかもしれない。エリツィンはソ連から引き継いだ既存のシステムと決別したいと思っていたからだ。

それを受けた第１期のプーチン大統領の目標は、元来大統領風に言うなら、メイク・ロシア・グレート・アゲイン。強く偉大なロシアの再興ではあった。だが、彼がエリツィンから受けついだロシアは、あらゆる意味でボロボロ。１人当たりＧＤＰは２０００ドルに満たず、産業も崩壊、対外債務漬けと最悪の状態だった。だから彼は、まず経済をたてなおして、産業の国際的な競争力を確保し、生活水準を引き上げねばならないと確信していた。そしてそのためにも、国際的な秩序――政治的にも経済的にも――への統合は必須だった。そのためなら土下座する用意だってあった。自由、民主主義、法治、市民社会といった西側の基本的な価値観も、当初はそこそこ本気で信じていたようではある。だが、エリツィン時代の混乱をもたらし続けた、政治的混乱は抑えねばならない。ある程度の強権で国をまとめることも

必要だ、と彼は認識していた。

同時に彼は、チェチェンの血みどろの内戦やテロにも対処する必要があった。彼が大統領代行に指名され、まっ先にやったのはチェチェンの前線にでかけ、兵士たちを励まし、共に新年を祝うことだった。

２００１年9月11日のアメリカ同時多発テロは、ある意味でプーチンにとっては好機だった。国内でのイスラム系テロ対策と、国際的なロシアの地位確立とを結びつけられる。アメリカに恩を売る好機でもある。プーチンは国内の反対を押し切って、アメリカに大いに協力し……そしてまったく見返りを得られず、話もきいてもらえず、軍備削減においてもイラク攻撃においても、一方的にアメリカに利用されるだけとなり、大きな失望を味わうこととなった。

この章では、プーチンが権力の座についた瞬間から、彼の最初の真摯な政策概要、まだアメリカとの連携に希望を抱き、きちんと交渉が可能だと信じていた頃のインタビューと、そしてその後次第に希望が崩れはじめた、モスクワのドゥブロフカ劇場占拠事件の声明を紹介する。

新千年紀を迎えるロシア（1999年、要約）

エリツィンから権力を禅譲されたプーチンが、ほぼそれと同時に発表したのが、この論文だった。もちろん、もともと用意していたものではある。しかし経済産業的な立場、今後残された課題については非常に明晰で率直に述べている。GDPの数字などは、実際より少し悪目に述べて、危機意識を煽ろうとしているとのこと。一方では、強い国家の重視、アメリカ追従ではないロシア独自の思想や社会体制の主張は、後の強権支配に続く萌芽とも言える。だが全体として非常に厳しいながらも前向きで現実的な路線を採用していたことがうかがえる。

9・11同時多発テロをめぐって：アメリカABC放送インタビュー（2001年）

アメリカABC放送が、正式な大統領となって初の渡米直前に、プーチンにモスクワで行ったインタビュー。9・11の直後であり、それを機にプーチンは、国際テロとの戦いを強くうちだし、アメリカのアフガン攻撃を皮切りにかなりの支援を行った。この時点では、それをテコにしたアメリカとの国際協力体制の構築が、ロシアの国際的な地位向上などでも有効だという見通しがかなりあったらしい。インタビューとしても率直で前向き。

その一方で、このインタビューの時点ですでにアメリカとのすれちがいの種は明確に出ている。アメリカは大量破壊兵器とかわけのわからないことを言って、イラクを爆撃したがっており、イランに対してもやたらに強硬策を求めていた。また核ミサイル削減のＡＢＭ条約からも一方的な脱退を主張している。プーチンはそうしたアメリカの変なこだわりをたしなめつつも、この時点では話し合いを通じた着地点が見いだせると思っていたようだ。だが結局あらゆる面でプーチンは失望を余儀なくされる。

モスクワ・ドゥブロフカ劇場占拠事件後の大統領ＴＶメッセージ（２００２年）

国内面でも、チェチェン紛争は収束するどころか膠着状態となり、ロシア国内でのテロも一時は収束していたものの、その後激しさを増すことになる。中でも特に大きかったのが、モスクワのドゥブロフカ劇場の占拠事件だった。すでにプーチンの経済政策の成功を受けて急増しつつあった（そしてそのためプーチンの支持基盤だった）ロシア都市部富裕層が、きわめて目に見える形で直接の標的となり、しかも制圧はできたもののかなりの被害者を出したことで、プーチンもショックだったようだ。これを機に、プーチンはメディア対応を含め国内のテロ対策やチェチェン対応について見直しを迫られることになる。

9・11同時多発テロをめぐって

：アメリカＡＢＣ放送インタビュー（２００１年11月７日）

概　要

9・11同時多発テロで、プーチンはだれよりも早くブッシュ大統領に電話をかけて全面支援を表明した。国際テロへの対応を軸に、アメリカとロシアは協力体制を築ける。しかしアメリカはアフガン爆撃で、かつてのロシアの教訓を十分学んでいない。特にアフガン国内の協力体制樹立と情報戦の面が弱いのではないか。またアメリカによるイラク攻撃はもっと状況を把握してからにすべき。イランについても同様。さらにアメリカのＡＢＭ条約廃止は理解し難いが、ブッシュ大統領としっかり話し合いたい。

質問：（9・11事件を知ったときの印象は？）[*1]

ウラジーミル・プーチン（以下プーチン）：執務中でしたよ、普通の仕事日でした。気持となると、様々な気持がめぐりました。まず、奇妙かもしれませんが、この悲劇で何か不思議な罪悪感を覚えました。ご存じの通り、私たちはいろいろ、様々な場所で国際テロの脅威について話しましたし、アメリカなどへの脅威もあり得ることは話しましたが、具体的にだれが、どこを攻撃するかは予想できませんでした。だから最初の衝動は失望と、繰り返しますが、ある種の罪悪感すら覚えたんです。

しかしそれとは別に、そのときアメリカの国民と指導層がどう感じたかについては、はっきり認識していました。というのもその少し前、１９９９年に、私たち自身もテロリスト攻撃の標的になったからです。北コーカサスやチェチェンでの出来事に限った話ではありません。ロシアの首都モスクワやその他ロシア連邦の都市での住宅街区の爆破で、何百人もの無実の被害者が死傷したのです。だからアメリカ国民がどう感じたかわかったし、きわめて強い共感を覚え、きわめて情緒的になりました。

＊1　訳注：念のためＡＢＣの質問部分は要約にした。

質問：（なぜ罪悪感を？　もっと警告しておけばよかったと思ったから？）

プーチン：同僚の行動についてあれこれ決めつけたくはありません、元アメリカ大統領についてもね。彼もまたむずかしい立場にあったのですが、もちろん、それでも私たちは国際テロとの戦いでもっと積極的な協力を当てにしていました。アメリカに対するテロリスト攻撃が防げたかどうかはわかりませんが、繰り返すと、もっと密接な協力が得られるものとは思っていました。

そして繰り返しておきますが、私たち、我が国の特務機関がこうした攻撃の計画についてタイムリーな情報を得られず、アメリカ国民やアメリカ指導層に、来る悲劇について警告できなかったのは残念なことです。

質問：（9・11後に最初に電話したのはあなただったそうだが、何を話したか？）

プーチン：まず、アメリカの人々との連帯を表明しました。いま、ロシア自身もテロリスト攻撃を経験していると言いましたね、特にモスクワの住宅が爆破されたときです。だから私は、アメリカ国民やアメリカ大統領の気持ちについて、きわめてはっきりわかりました――ほかのだれよりもよくわかったでしょう。アメリカ国民との連帯を示したくてたまらなかった。それは私個人についてだけでなく、ロシア国民としての連帯です。それがとても重要な

のはわかっていたし、衝動的ではなく、これは正直に申し上げておかねばなりませんが、実利的な配慮をもって行動したのです。当時もよくわかっていたし、今日でも思うことですが、テロとの戦いにおいて国際社会の活動をまとめるのはきわめて重要なんです。アメリカ国民に我々の連帯を報せて、この困難な時点でアメリカが孤立していないことを報せるのが重要だったのと同じくらい。

質問：（アメリカに協力したらあなたの国内的な立場が悪化したのでは？）

プーチン：こう言うと驚くかも知れませんが、ロシアははるか昔にその選択をしていたんです。残念ながら、みんながそれに気がついてくれたわけではありませんが。そして9・11以降はみんな嫌でもそれに気がつかざるを得なくなったというだけです。実際、ロシアが文明社会すべて、特にアメリカにとっては真に戦略的な仲間になれるし、ならねばならないというのが、だれにも得心できたはずです。9・11の悲劇的な出来事は、その点について万人の目を開いたと思います。効果的に対応したいなら力を合わせる必要があると教えてくれたのです。

質問：（ロシアと米国は第三次世界大戦で力をあわせるということ？）

プーチン：いやね、ロシアとアメリカは長いプラスの関係を持っているんですよ。何世紀

もの間、ロシアは伝統的にアメリカに共感してきました。歴史を振り返るなら、1775年にイングランド王は、北アメリカで戦う傭兵を積極的に集めていて、エカチェリーナ二世にロシアから義勇兵を送ってくれと頼みました。彼女は私信でそれを、穏やかながらかなりきっぱりと断ったんです。ロシアは旧世界で、南部と北部の戦争から生じかねなかったアメリカ合衆国分断に、全面的に反対した数少ない国の一つでした。逆にアメリカのほうは、クリミア戦争でロシアに肩入れしてくれた唯一の列強です。そして他にもいろいろよい事例はありますよ、もちろん第二次大戦と第一次世界大戦では、私たちは同盟国で、共通の敵と戦うためにいろいろやりました。

そして今日、国際状況が根本的に変わった今日、まったくちがった種類の大規模脅威に直面しているとき、私たちはこうした問題でお互いに支え合うしかない。そしてそれをかなりうまくやれると確信しています。

質問：（冷戦は終わったとみているか？）

プーチン：もうとっくの昔に終わったんじゃなかったですか？　問題は、冷戦時代に作られ冷戦の利害に貢献するためのすべては、そうした道具の多くがまだ生き残っていて、独自の命をもって生き残ろうとしているということです。世界で起きた深遠な変化を理解して、

協力の邪魔になるあらゆる障害をなくして力を合わせるのが私たちの任務です。

質問：（すると答はイエスなのか？）

プーチン：それは疑問の余地がありません。冷戦は終わっただけでなく、ロシアと米国が手を取り合って、現代の多くの問題解決で協力する環境が作られています。経済と安全保障の両方の分野での問題解決です。

質問：（ブッシュ大統領は、あなたの魂を見たと言っているが？）

プーチン：ブッシュ大統領が私の魂の中に何を見たか、私には説明しかねますねえ。ブッシュ大統領自身にあなたが何か誘い水の質問を投げかけてみたらどうですか？　でもその台詞を聞いて笑った連中をどう思うかわかりますか？　それを私がどう思うか？　アメリカ大統領になったのがそういう連中ではなく、ブッシュ大統領だったのは、偶然ではないと思いますよ。彼のほうがその連中よりも物が見えていて、問題への深い洞察力を持っているということなんですから。

9・11の悲劇的な出来事でロシアと米国の関係が動揺しなかったのは、ブッシュ大統領の立場のおかげが大きかったというのは、是非言っておきたい。

最初に電話したのが私だと繰り返しのべたりしてくれたことはありがたく思っていますが、

私がそれをやったのは、彼のロシアについての立場のおかげも大きいので、これについてはブッシュ大統領の役割が大きかった。

だから彼は、テロに対する国際同盟がこれほどうまく形成されていることに大きく貢献したし、ちなみにその方向への第一歩はリュブリャナでの私たちの会談で、彼が私や我が国へのいろいろ親切な言葉を向けてくれたことでした。

もっと言いましょう。えーとですね、ブッシュ大統領とのやりとりは短いものですが、私は彼がしっかりしたパートナーだと確信しています。いろいろな問題では論争もするし、意見が合わないこともある。でもすでに気がついたことですが、何かに合意して「イエス」と言ったら、必ず「その問題を最後までやりとげる」。いつも到達した合意が実行されるようにします。私だけでなく、ロシア指導層すべてが大統領のその性質には注目しています。これは重要な性質であり、私たちはそれをとても高く評価します。この人物とは取引できるとわかるし、複雑な交渉や意見交換を経て到達したものでも、合意は遵守してくれるとわかるからです。

質問：（ブッシュは有言実行の人なのか？）

プーチン：はい、まったくその通りです。

質問：（あなたはいかが？）

プーチン：努力はします。

質問：（核兵器削減とＡＢＭ条約についてアメリカとの着地点は？）[*2]

プーチン：断言するのはむずかしいですね。妥協というのは激しい交渉の結果としてしか見つからないので。でも攻撃兵器と防衛兵器システムについて言えば、ええ、それが我々のアプローチです。我々は両方の要素をまとめて考慮し、まとめて交渉すべきだと考えます。両者は密接に関係しているからです。

攻撃兵器についての合意を得るための、あるプラットフォームがあります（これは攻撃兵器をある上限以下に削減するという話で、これについてはすぐにお互い受け入れられる合意に到達できるはずです）。この文脈に基づいて、防衛システムについても共通のアプローチが見い

＊2　訳注：この頃、アメリカはレーガンのスターウォーズ計画の遺物ともいうべきミサイル防衛システムの構築にこだわっており、その邪魔となるＡＢＭ条約からの一方的離脱を通告していた。ロシアはＡＢＭ条約の改訂で対応したがっていたが決裂。これが後にＮＡＴＯ拡大と共に、プーチンのアメリカ不信と自国の軍事展開の口実として使われることになる。ここではまだ、それが決定的には決裂しておらず、ロシアはかなりの歩み寄りの姿勢を見せていた。

だせます。いずれにしても、私たちの立場はかなり柔軟です。我々は、１９７２年の対ミサイル防衛についての条約が重要で、有効で有用だというのを基盤に話を進めますが、合意を達成するための共通の交渉プラットフォームがあります。少なくともそう願いたい。

質問：（もっと詳しく！）

プーチン：まずＡＢＭ条約はすでに防衛システム構築の可能性を含んでいます。我々はモスクワ周辺にそれを作り、アメリカは主要な核基地の周辺に作っています。条約では他にも、共通のアプローチを見つけるための条項を持っています。とにかく、こうした条項から出発することで既存条約の範囲内で条件を構築できると専門家たちは確信していますよ。そしてその本質を変えなくても、現代の課題に対する適切な対応を盛り込み、アメリカの主導部が戦略防衛の分野で持っている懸念を取り除けるような条件を作れるはずです。

質問：（アメリカの防衛システムを容認する可能性があるのか？）

プーチン：ブッシュ大統領の立ち位置も変わるし、その意見は凝り固まってはいません。今日我々の相方は、限定的な防衛システムでお互いに被害を生じさせず云々と述べています。しかし繰り返しますが、これは専門家同士の問題です。正直に言わねばなりませんが、この問題について決断するにあたっては、ロシア連邦の国家安全保障の利害から出発し、同時に

国際的な安全保障の哲学と我々が考えるもの、その一般的な発想から出発しなければなりません。

質問：（アメリカのテロ反撃支援をしているが、アメリカに恩を売りたいだけでは？）[*3]

プーチン：だれがそんなことを言ってるんですかね。チャーチルだったと思いますが、きわめて適切なことを言っています。政治家は次の選挙のことを考え、国士は将来世代のことを考える、とね。この台詞は現在の状況を適切に表していると思います。ロシアはテロとの戦いでアメリカを支援するにあたり優遇やごほうびは期待していません。テロリズムと戦いそれを制圧するのは我々の共通の目標なんです。私たちには国際テロリズムという共通の敵がある。

私たちがいっしょにやっている作業は共通の利害に基づくものです。しかし、信じてほしいのですが、ロシアを現在の国際社会にあらゆる意味で統合させるのも、やはり私たちの共通の利益に資するのです。それは防衛システムや政治システムにも統合してほしい。西ヨー

＊3　訳注：プーチンは9・11直後に、軍事演習の中止、アフガンその他の手持ち諜報の提供、周辺基地の使用権やテロ対策に関連した上空飛行許可など、きわめて鷹揚な協力をアメリカに提供している。ロシア国内のタカ派（通称シロヴィキ）にはそれについて、西側追従の弱腰と非難されたのは事実。

ロッパ指導者やアメリカの指導者たちとの最近の議論から判断するに、みんなそれは十分に承知しています。この先もお互いに役に立つことがしばしば生じると私は確信しています。

ついでに言えば、ロシアの西側やアメリカとの融和についての話ですが、ロシアだけでなく西側社会自体もそれに関心があるので、ロシアが現在占める地位についてのロシアからの支払いなのだという見方はまったくできません。ロシアは交渉しているのではない。協力を申し出ているのです。

質問：（アフガニスタンでアメリカの作戦は成功しているか？）

プーチン：あなたの質問は行間に含みがありますね。最近、西側メディアの人々からそういう質問をよく受けますよ。表現こそちがえ、それは要するに、アメリカのアフガニスタンにおける対テロ作戦の有効性をどう見るのか、足踏み状態じゃないか等々といったことです。そういう質問は、地上の現実を知らない人しかできない。何が起きているか知らず、即座に輝かしい即効性ある結果が可能だと思っている人たちです。アフガニスタンでの軍事行動は、生やさしいものではありえないし、そんな約束はだれもしていない。ブッシュ大統領は、アフガニスタンへの攻撃にあたり、ロシア空軍の支援を受けたらあらゆる問題を2～3日、3～4週間、あるいは数ヶ月ほどで解決します、なんて言ったことがありますか？　そんなこ

とは一言も言っていない。それが長期にわたる、ヘタをすると身動きとれない紛争になって犠牲も必要になるかもしれないと言いましたが、なぜかだれもそれを思い出してくれませんね。

しかしロシアの手持ち情報から言えます。我が国の経験とアフガニスタンでの戦争と、コーカサスでの出来事から言えることです。国際社会がアフガニスタンで起きていることにまともな注意を払わない状態が何年続いたでしょうか。長年かけてテロリストたちは、実質的にアフガニスタン全体をバーゲン価格で買い取ったばかりか、そこに定着して、今日起きていることに十分な用意を整えたのです。彼らは手をこまねいてはいませんでしたよ、それは保証します。現在の行動の準備を整えるのに十分な人力とリソースを持っていたんです。

さらにいまや明らかですが、彼らは対テロ紛争での活動を別の領域、つまり宗教間の戦い、イスラムに対する戦いにシフトさせようとしてきて、決して成功していないわけではない。これは決して許してはならないことです。実際、連中はトランプの山のカードをすり替えるカード詐欺師のようなものですが、おかげでアフガニスタンでの我々の仕事もアメリカの活動もややこしくなります。

かつてロシアが直面し、いまアメリカが直面しようとしている別の側面があると思います。

ちょっと言いにくいことではあります。私はすぐ訪米予定で、これから言うことは批判っぽいものだからです。アメリカはある意味で、軍事面ではなく情報圏で戦争に負けつつあると思います。向こうのほうが積極的で、自分たちの主張をもっと鮮明に提示している。もっと感情的で、相手と何も共通点がないのに普遍的な人間的価値に訴えることでテロと戦おうとする者たちより、うまく目標を達成できています。ロシアとの戦いでもこれを実にうまく使ったし、みんなそれで負けていると思う。この分野ではまだまだやることがあります。

軍事的な面でいえば、我々から見ると、すべてはなるべくしてなっている感じで、アフガニスタンに秩序を回復し、アフガン人が自国領土でのテロを克服して、民主主義の原理を取り戻す支援をするためには、かなりの手間暇とおそらく犠牲もかかるでしょう。この点で私はアメリカの指導層に同意します。これはアメリカや、テロとの戦いに共通のコミットメントを行った国々だけでなく、国連の努力も必要だし、これは経済、社会、政治的な対応の複合体を必要とします。

質問：（それは広報面での話か？）

プーチン：ええもちろん。何が起きているか見て下さいよ。テロリストが人々を殺し、拷問し、テロリスト芝居を仕立てるやり方は、一回放映されたらすぐに忘れられますが、もし

残念ながら民間人の死傷者が出たら、それがやたらに喧伝されて誇張されます。そしてもちろんその狙いはただ一つ。アフガニスタンには敵対勢力がいて、敵の狙いは国際同盟を内部から揺るがせて、アメリカの政治指導層に圧力をかけ、アメリカ内部の国内状況を不安定化させることです。そしてアメリカを支援する国の政治指導層に圧力をかけることです。それがあの活動の狙いですし、時にはそうした目標を設定する連中は成功しおおせているんです。

質問：（つまりアメリカは情報戦に負けている？）

プーチン：明らかに勝ってはいませんねえ。

質問：（ビン＝ラディンの発見は？）

プーチン：見つけることは可能だとは思いますが、むずかしいでしょう。もちろん重要ですよ、首謀者は罰せられねばなりませんから。しかし全体として、それでテロリズムの問題が解決するわけではない。国際テロと世界的な規模で有効に戦うには、すでに述べたように、軍事力だけでなく他の手段も使わねばならない――政治、経済、社会的な。あの邪悪と戦うには国際社会による多面的な対応が必要なんです。

質問：（ロシアのアフガニスタンでの経験をアメリカは活かせるか？）

プーチン：アメリカも含め、私たちみんなが教訓を引き出すべきでしょう。ロシアがアフ

ガニスタンでの戦争に負けたとは言いません。全体としては成功裏に兵を撤退させましたよ――かなりの大軍勢をですよ。そしてカブールに親ソ的な政権を残しました。しかし旧ソ連指導部のまちがいは、まさに親ソ政権を残していったということです。アフガニスタンはだれにも民営化などできない国です。アフガニスタン指導部は、成功したいならばアフガニスタン国内のあらゆる社会民族集団の支持を得なければならない。未来のアフガン指導層は、広い国際支援に頼らざるを得ないんです。

繰り返します。だれもアフガニスタンを民営化などできません。アメリカだろうと、ロシアだろうと、その近隣諸国だろうと。みんなそれは理解しなければならない。それがまっ先に学ぶべき教訓です。そして第二に、アフガン国民に武力で意思を押しつけてはならない。アフガン国民が自ら問題を解決する支援をすべきなんです。ありがたいことに、アフガニスタンにはそうした勢力がいます。国際的に承認されたラッバーニー博士の政府と、その軍事勢力の通称北部同盟です。他にも支援してよい反対勢力があり、是非支援すべきです。こうした考察から出発すれば、ソ連の活動から得られた負の体験すべてに留まらず、ずっと以前の、たとえばイギリスのアフガニスタンにおける経験も考慮するなら、将来的な成功も十分に期待できるでしょう。

質問：（ロシアのアフガン派兵はあり得るか？）

プーチン：それは選択肢としてありえませんよ。きわめて困難だし、その理由を説明しましょう。ロシアがアフガニスタンに兵を送るのはあなたたちアメリカにとって、ベトナムに兵をまた送り直すのと同じ話なんです。いやもっとむずかしいかもしれない。アフガン戦争が終わったのは、ベトナム戦争ほど昔のことではありませんから。しかし別の話もしなければなりません。ロシア軍はすでにアメリカを支援しているんです。これはバーチャルな話ではなく実質的な支援です。まず諜報を提供していますし、しかもきわめて良質で高品質な諜報です。アフガニスタン情勢の知識で手助けしているし、北部同盟も助けています。北部同盟には何千万ドル相当もの兵器を提供しました。アメリカの人々、アメリカ国民やアメリカ軍人を助けるのを支援する用意はあるし、これはアフガン領内でも同様です。

しかしもう一つ指摘すべき状況があります。今日のロシア軍は――北コーカサスやチェチェンでの大規模軍事作戦は止めましたが――いまだに傭兵たちに直面していて、アラブ諸国からの連中もいるんです。彼らはこんにちに至るまで活動を展開しようとしています。

上海での会合で――大した秘密でもないので、ばらしてもブッシュ大統領に怒られないと思いますが――彼に国際テロリストがチェチェンからアフガニスタンに移動しようとしてい

るという作戦文書をいくつか見せました。その狙いは、引用すると「アメリカ人どもを殺すため」です。いまのは引用ですよ。アメリカ国民はこれを知る必要があります。妄想やプロパガンダではない。現実です。そしてロシアはすでに何千人もチェチェンで失っていて、多くは国際テロリストに対する軍事行動での犠牲です（残念ながらそのテロリストのほとんどはイスラム諸国の国民で、多くはアラブ諸国から来ていました）。これであなたの質問には十分答えたと思いますが、さらに一つ付け加えておきたい。ロシア軍はすでにバーチャルではない、完全に具体的な支援をしていて、それは我が軍の行動にもあてはまるんです。

質問：（9・11テロ犯がイラクと接触していたとされるが、イラク爆撃は支持するか？）

プーチン：イラクの問題については、とっくにロシアとして立場を決めています。イラクが大量破壊兵器を持っているかどうか、そうした兵器を作ろうとしているかを、文句なしに見極めるという国際社会の望みを支援することです。これとの関連で、イラクの関連施設に対する国際査察は再開されるべきだと考えており、それに関連する提案もして、アメリカの仲間を含め同輩たちと議論しているところです。

遺憾ながら、イラク指導層に我々の提案が受け入れ可能なものだと説得するのには、残念ながら成功していません。だから複雑なプロセスです。こうした問題はイラクを爆撃して解

決するものとは思いません。ご承知の通り、英米空軍はすでに空爆を実施していて、残念ながら何も結果は出せていません。しかし何を実現しようとしているのかは、理解すべきです。イラクに大量破壊兵器がないことで満足したいなら、その目標に向けて進むべきです。繰り返しますが、我々は提案を持っています。イラクは国際査察団に施設訪問を認め、そのかわりにイラクへの制裁は解除すべきです。そういう解決策が見つかれば、多くの疑問はそれでおしまいだと思います。

質問：（それをやろうとしますか？）

プーチン：しますよ。やろうとするだけでなく、ヨーロッパやアメリカの相方とこうした相談をすでに積極的に進めています。

質問：（イランは核兵器開発をしているのか？）

プーチン：そんなのはウソですよ、現実に基づくものじゃない。二つの概念をごっちゃにしているだけです。イランとは軍事技術協力をしているし、イランに武器は売っています。しかし通常兵器です。核兵器やミサイルや、まして大量破壊兵器を作れるようなハードウェアや情報は、一切イランに売っていません。

原子力の分野でのプロジェクトはあります。アメリカも北朝鮮で類似のプロジェクトを持

っていますよね。核兵器の製造とはまったく関係ない。イランの核兵器開発を助けるような技術の移転にはすべて反対しています。

イランが大量破壊兵器を作ろうとしているという報告はあります。まず、これを確認すべきです。そして第二に、国際社会が全体としてこの問題を検討すべきで、お互いに不拡散制度に違反したとか糾弾しあうべきではない。信頼を構築することで、そうした展開は避けられる。

世界がどれほど変わったか認識すべきですよ。この地域には別のパキスタンという国があり、確実に核兵器を持っています。パキスタンが核兵器を持つ手助けはだれがしたのでしょうか？　あそこでの状況がいかに危ういかは周知の通りです。みんなあの国での状況を抑えようとしているムシャラフ将軍を支援すべきですが、いずれにしても我々にとっては心配の種でしかない。

何を言いたいかというと、不拡散の問題でやりあうのはやめましょうということです。現代の大きな脅威の一つだと理解しましょう。ヘタをすると、現代最大の問題かもしれない。そして相互の信頼を構築することで、他の分野での共同活動、たとえば麻薬に対する戦いなどで協力関係を確立しなければならない。あの分野では、専門家同士がきわめて有効に協力

しているじゃないですか。不拡散についても同じくらい有効になれるはずです。

質問：（アメリカの炭疽菌と天然痘テロはロシア発の可能性があるか？）[*4]

プーチン：それは不可能だと思う。そして私の知る限り、アメリカでの物質の分析によれば、それがソ連や、ましてロシアで生産されたはずがないことは、疑問の余地なく示されたはずです。第二に、この種の物質はロシアでは安全に警備されていますし、ソ連時代も同様です。だからそれはあり得ない。

質問：（それは炭疽菌の話ですね、天然痘もそうですか？）

プーチン：ええ、炭疽菌と天然痘について言えます。さらに、アメリカの相方とは連絡を取り合っていて、食い違いはありません。情報交換もしています。アメリカの相方に関心ありそうな情報は伝達して専門家が議論して分析しています。

質問：（アメリカに炭疽菌ワクチンを提供するか？）

プーチン：すでに述べましたが、アメリカとの協力全般、特に国際テロとの戦いは一時的な活動とは思っていません。多くの活動分野でロシアはアメリカの仲間か、同盟相手にすら

＊4　訳注：2001年9～10月にアメリカで、炭疽菌が封入された手紙が議員やメディア宛に送られた事件。手紙の内容からイスラム系テロリストの関与が疑われたが2005年には米国科学者が犯人と結論されている。

なる必要があると信じていますし、その邪悪との戦いでアメリカ国民を支援し手助けするのは疑問の余地がありません。できる限りのことはしますよ。さらにアメリカ側は、そうした可能性を打診しているし、うちの専門家もアメリカのパートナーたちと作業をしています。この仕事はきわめて実務的に継続されます。

質問：（元KGBだからあなたが危険人物という見方をどう思う？）

プーチン：そういうことを言ったのは国民ではなくマスコミです。そして国民はその情報から結論を導き出したんです。しかしマスコミは、私の人生の相当部分を見過ごしたようですね。ソ連の国家公安機関、諜報局で働いていただけでなく、私はレニングラード大学で副学長として働き、後にペテルスブルク（レニングラード）議会で働き、ペテルスブルク市長補佐として6年働いているんです。大統領府で長いこと、数年働いて、ロシア初代大統領の側近でもありました――こうしたすべては、おもしろくないので見過ごされて忘れられています。世間はみんなが知りたがる「オイシイ」情報を食わされているので、そんなイメージができたんです。

私の活動のおかげでそのイメージも変わりつつあるのはありがたい。人を判断するには、その人が自分について言うことではなく行動を見なさいという格言がロシアにあります。ロ

シア大統領についての認識変化は、ロシア指導層の実務的な行動に基づくと思いますよ。

質問：（自分について、平静で厳しい人間で、恐怖や不安はあまり抱かないと述べているが、本当？）

プーチン：自分では言ってませんよ。勤務先のソ連外国諜報局の心理学者たちが言ったことです。でも、いまのところそれが不利には働いていませんね。

質問：（奥さんは厳しい人と評しているが？）

プーチン：それは妻の判断です。女と議論しても報われない。

質問：（子供時代は苦しかったそうだが？）

プーチン：いやあ、私の子供時代がつらかったと言われると面食らいます。豊かさの中で暮らして、現代文明の恩恵をすべて享受してきた人にはそう見えるのかもしれない。私はそんな恩恵は受けなかったが、別に恵まれないとか惨めだとか感じたことはありません。基本的には、ソ連――いまはロシア――国民何百万人と同じような子供時代です。むしろ平均よりは恵まれていたかもしれない。重要なのは、生活の物質的な条件ではなく、道徳的な条件です。そして重要なのはみんなが愛情をもって接してくれたことです。両親にはとても大事にされて、それはいつも感じたし、両親にはとても感謝しています。その愛情こそが、私の

人格を形成した主な要素です。

質問：（子供の頃からスパイになりたかったというのは？）

プーチン：別にそれは秘密でもなんでもありませんよ。正直いって、私は小説や映画に影響を受けたんですよ。単にスパイになりたかったのではなく、国のために役に立ちたかったし、諜報エージェントという仕事はリスクと、ある種のロマン主義を含んでいますから。そうしたすべてに影響されての決断です。さらに私のほうも、知的な努力が必要だった。大学に入って外国語を学ばねばならず、そのすべてが私には高いハードルでした。常に自分の課題を設けてそれを解決し、自分の生活をある種の前向きな決意で満たしたんです。

全般に、私は後悔しないようにするし、一般に何も後悔しません。それについても後悔はしていないと言わざるを得ない。やり直せたとしても、同じことをしたでしょう。これまでの人生で恥じるべきことは何もない。私はかなり成功した諜報官で、ずっと国のために働いてきました。

質問：（殺人命令を下したことは？）

プーチン：いいえ。一般に、私の仕事はもっと知的な性格のものです。各種の情報、主に政治的な性質の情報を集めて分析するんです。さらに私が公安局に加わったのは１９７０年

代半ばで、その前はペテルスブルク大学を卒業して、そこでは法律を学んでいたんです。

質問：（ええ、法学部卒でしたね）

プーチン：諜報の専門学校ではないんです。それは後に修了しました。しかし基本的な教育はペテルスブルク大学法学部でのもので、教授の一部は１９１７年革命以前からいる、きわめて高齢の人もいました。当時も今も、とてもいいヨーロッパの法学部です。残念ながら私の教授たちの一部は、いまはアメリカで暮らして教えています。

だから諜報局に入ったときには、ある種の背景とある種の世界観を持っていました。さらに１９７０年代半ばでは、１９３０年代のソ連のような状況とはまったくちがった。１９３７年には大量粛清がソ連で行われましたから。そんなものは１９７０年代にはまったくなかった。まして、法を逸脱した処刑命令をだれかが下せたなどというのは、思いもよらないことです――１９７０年代にはとにかくあり得ない。だからありがたいことに、そんなことは私には起こらなかった。

質問：（柔道の影響は？　敵の倒し方か？）

プーチン：そのスポーツに教わった最大のことは、相手に敬意を払うということです。

質問：（哲学は？）

プーチン：いやあ、正直そういう話には入り込みたくないですね。というのも哲学だの導きの思想だのの話をするなら、あなたに屈服して心を開くことになりますから。教会の懺悔みたいにね。しかし、現代道徳律の基盤となる主要な思想や主要な原理――それがあらゆるまともな人々を導く思想だと思いますよ、この私を含め。

質問：（なんでフワフワのトイプードルなんかに夢中に？　なぜロシア猟犬を飼わない？）

プーチン：まず言っておくと、昔は猟犬を飼ってたんですよ。残念ながら死んだんです。車に轢かれて。とても優しい猟犬だからみんなとても悲しい思いをしました。とても力強い、貫禄ある犬でしたが、とても優しくて、よい態度の犬でした。[*5]

あのプードルに私が夢中とは言えませんね。プードルが大好きなのは子供たちです。プードルは2匹、オスとメスがいて、子供たちと妻の犬です。でも私は別の犬を飼っている。黒いラブラドール犬で、このラブラドールとは相思相愛です。

質問：（アメリカには夫人同伴？）

プーチン：ほぼまちがいなく。何か起こらない限りはね。とにかく大統領は妻と私を招待

＊5　訳注：サンクトペテルブルク市長室勤務だった1992年頃にマィリシュという犬を飼っていたが、車に轢かれた。プーチンは深くその犬を悼んでその後長いこと次の犬を飼わなかった。

されたので、私は妻と参ります。

質問：（ファーストレディーはロシアでは重要？）

プーチン：いやあ、私たちの伝統はアメリカとはちがうんですよ。そのせいだか、あるいは彼女の心構えのせいだか、私の妻は公的な立場になろうとはしないんです。そしていずれにしても、大統領に選出されたのは私であって、妻じゃない。

でも、とても活発な女性ですよ。語学の専門家として教育を受け、今日ではロシア語の維持と促進に大いに関心を払っています。とてもいい大義だと思うし、できる限り彼女を支援して支えようとしていますよ。

質問：（イスラエルとパレスチナの関係はどうする？）

プーチン：私たちがあそこの状況について懸念している理由がいくつかあります。まず、中東の問題に対するロシアの態度は、旧ソ連のものとはまったくちがうものです。ご存じの通り、かつてソ連は外国渡航を制限していました。一般に全体主義政権は孤立しようとしますが、そうした時代はとっくの昔に終わっています。

我々は自国民――ロシア連邦領に暮らす人も、国外に出て外国に住んでいる人も含めています――を自国の人間と知的資源の拡大だと見ています。イスラエル人口の三分の一近くは

ソ連やロシアからきています。そして我々はそうした人々の運命に無関心ではありません。その多くはパレスチナで戦線に立っていますし、多くの死者が出ているのは公然の事実で、我々も懸念しています。しかもそうした人々は、単にソ連やロシアを離れたというだけではない。ロシア語を母語として、ロシアの文化伝統の中で育った人々で、ロシアに親戚や友人を持ち、ロシアをよく訪れる人々です。だから繰り返しますが、彼らの将来は気にかけています。

その一方で、アラブ世界やパレスチナとも昔からのつながりがずっとあります。パレスチナ国家の承認はまったく問題ないし、それは私以前に実質的に行われています。この独特の組み合わせで手打ちができるのではと信じています。とにかく、紛争解決に役立つどんな仲介役でも果たす用意があります。

質問：（ロシアのパレスチナ問題の見方は？）

プーチン：即座に暴力を止めて対話を再開する以外の道はありません。私たちの共同活動で紛争の両サイドをそういう状況に持って行ければと切望します。

質問：（独立パレスチナ国家があるべきだとお考えですか？）

プーチン：そのように述べた国連決議があるし、それに従うべきです。

一般に、地域に平和をもたらすためには、永続的な平和をもたらすためには、世界のあの爆発的な地域に住むすべての人々が侵犯されているような気持にならず、逆に安心できるようにすべきです。たぶんイスラエル人もパレスチナ人も、どちらもこれを求めていると思いますよ。

質問：（核物質がロシアから流出した可能性が言われているが事実だと思うか？）

プーチン：いや、それは現実と対応した話だとは思いません、ウソです。だれかがなにか核の秘密を売ろうとしたことはあるかもしれない。でもそうした出来事の文書証拠はありません。核不拡散の問題を論じたときに言いましたが、それが現代で最大の課題だと思うし、核技術や大量破壊兵器などの拡散を防ぐために力を合わせねばなりません。

質問：（これは訪米での重要問題の一つですか？）

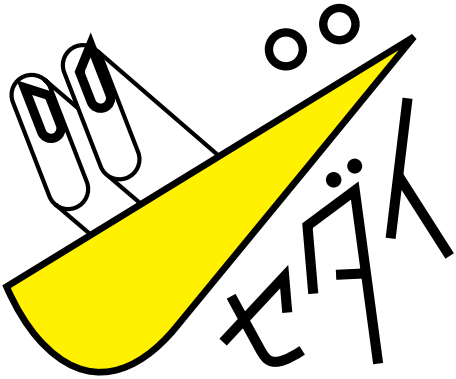
プーチン：すでにこの話はブッシュ大統領としているし、もちろん議論を続けます。現代の重要問題ですから。

質問：（英語で何か一言）

プーチン：［英語で］つらいなあ。アメリカへの訪問がアメリカの人々と、私たちロシアと、両方の国に役立つものになることを期待しています。

声：（お見事。ありがとうございます）

プーチン：ご質問、ありがとうございました。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!